
Fallout-Another Story

フランク・ホリガン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a l l o u t - A n o t h e r S t o r y

【Nコード】

N 6 6 2 4 Z

【作者名】

フランク・ホリガン

【あらすじ】

世界が滅んだ忌まわしき戦争、世紀末を迎え混沌とした世界に變貌した合衆国

青年は戦前から続く強大な組織の一員だったが、その組織も結束した人々の力に敗北した…

彼は今までの人生と見切りをつけ、合衆国首都…ワシントンDCへと向かう

彼はそこで過酷な世紀末を逞しく生きる、無数の人々に出会うことになる……

F a i l o u tの世界を勢いにつて、書いてみた
旧作は無知ですが、新作二つはある程度知ってますので、なんとか
なるでしょう

これは続けていきたい

国家と栄光

どこが最初にあの忌まわしい兵器を使ったのかは、数百年経った今では明らかではない：一つ確実に言えることは、人類史上最も愚かなあの戦争は、たった二時間で集結したことだ

ほんの二時間：ただなんとなくで過ごしてしまうこの二時間で、人類が築き上げてきた文明は全て消えた

爆弾の炎と死の灰は、逃げ遅れた人間とそこにいた生物を死に至らしめ、大地を焼き尽くした

水も大地も空気も汚染したこの世界は、以後数百年に渡って、生物が生存するには過酷過ぎる世界となった：

だが、人間を含む生物たちは、世紀末の世界に見事に適応した

生物たちは姿を変えて過酷な環境に適応した……理由は定かではないが、あの戦争の後の一夜にして、無数の新種が誕生したという：

人間もまた適応した：安全な場所に人々が集まり、かつてのような営みを築き上げる

ある者は、そういった集落を転々とし、キャラバンとして交易をした
だが全ての人間が、正常な営みをしたわけじゃない：今となっては、正常とは何なのか、本当の意味は忘れた：

いつしか、キャラバンや集落に襲撃・略奪を仕掛ける所謂レイダーと呼ばれる、残酷な無法集団が現れた

世紀末の過酷な生活に屈せず、今日と明日の糧を得るために苦勞する者を襲い、無慈悲に残酷に奪い去る：それもまた、世紀末における

る適応の一つと言えよう

”ナヴァロ前哨基地” 私が生まれ育った場所であり、15になるまでそこが私の世界だった

あの世界が滅んだ戦争から二百年、私の父が所属していた戦前の軍事結社は、永い沈黙を破ってウェイストランド（荒れ地・不毛の地）に進出した

兵士たちは、かつて繁栄していた国家の荒廃ぶりに嘆き、そこに蔓延る”変異種”を目の当たりにした

そして彼らは、かつての栄光を取り戻すべく、変異種を一掃する計画を立てた

当時の、リチャードソンという名の大統領のもと、組織は変異種を抹殺する計画を進めた

変異した人間と純粋な人間を捕らえ、ついに彼らはあるウイルスを完成させた

それは変異種を死に至らしめるウイルスであり、大統領はそれを上昇気流にのせて、世界に広げるつもりだった

だが、それは実現しなかった……強大な組織が何故敗北したのか？上層部の人間たちは理解出来なかっただろう……たった一人の人間に計画を阻止され、基地を破壊されたとは

そして数十年もしないうちに、組織のもう一つの基地であり、私の

住むナヴァロに追討軍が現れた

NCR：新カリフォルニア共和国は弱小集団から成り上がった、強大な集団の一つだった

今や組織は攻める側ではなく、必死で守る側となっていた：

戦前のハイテク武器や兵器も、NCRの圧倒的な数の前には、多勢に無勢だった

父は青年だった私を基地から逃がし、東に逃げるよう言った
西海岸の主要な都市は、いずれNCRの領土となる：組織の一員や
関わりのある者は、死刑か終身刑に処されるだろう

東海岸は西部よりも荒廃していると聞く：だが、少なくとも西部に
いるよりは助かる見込みがある

私は父の言いつけを守り、ナヴァロを密かに脱出した：上官にでも
見つかったら、敵に殺されるよりも頭を撃ち抜かれる

私のすぐ後に、基地から何人が逃げ出して者がいる
だが基地にいた大半の人間は、NCRの手によって殺された

私はその様子を遠くから見ていたが、不思議と怒りは湧いてこなかった

当然だ：組織がウェイストランドの住民たちにしてきた、数々の暴
拳を知っていれば

人は過ちを繰り返す……戦前の国家がそうであったように、組織も
また潰れていった

人間は過去の過ちから学び取ろうとするが、大事な場面でそれを活

かすことは出来ない

人は争いを止められない……核の炎が全ての文明を焼き尽くそうと、
全てが終わ리ではない
次なる争いの時代の、始まりでもあるのだ

私はナヴァロに向けて敬礼し、組織の栄光と最期を見届けた後、東
に向けて歩みを進めた
人生はやり直せる……私はかつての合衆国の首都、ワシントンDCに
向かうのだ

Fallout 始動:

国家と栄光（後書き）

たぶん注目度の低い作品となりますが、どうぞよろしく願いします

メガトン

ナヴァロ前哨基地、西海岸の地を発ってから数年…

荒れた大地と放射能、危険な野生動物や野盗から身を守り抜き、私はようやくかつての首都”ワシントンDC”へと辿り着いた

本当に、長く過酷な旅だった……まずウェイストランドで最も大切なのは、飲料水の確保だった

あの戦争から数百年経った世界ではあるが、未だに水源の多くは放射能によって汚染されている

それに、水を巡って不毛な争いも多く見てきた……たったコップ一杯の水のために、人々は殺し合うのだ

浄水器があつて毎日普通に水を飲んでいた私には、目を疑うような光景だった

ウェイストランドの人々は、その日を生きることにも必死だ

私は組織にいた経験から、旅の途上で医療を施したり、汚染した水から飲料水を精製する方法を教えた

人々は私に感謝の意を示したが、半数近くは精製水を巡って争った中には私を襲う者もいたが、私は素早く銃を引き抜き、襲撃者を返り討ちにした

私はこの過酷な世界を、生半可な善意などでは救えないことを痛烈に感じた

だが、手の届く限りの人々であっても、自分のこの知識で救ってみたいと感じた

繁栄を誇っていたワシントンDCは、かつての面影など皆無であり、旅の途上で見てきた地のように荒れ果てていた
幼少期に父から聞いていた話とは、あまりに違いすぎる光景……
大地は草木一本生えないほどに荒れ、この地は西部以上に汚染が強かった

東にある首都のダウンタウンを目指して、数週間が経つ
食料及び飲料水が無くなりかけたところ、ちょうど人の住む集落に辿り着いた

錆び付いた鉄板でぐるりと囲み、ゲートには一体のロボットと、ゲート上部の見張り台にはライフルを携えた男がいた
見張りの男は私をマジマジと見つめた後、中に入る許可をくれた

ゲートをくぐって街の内部に入ると、中央のくぼみを囲むように建てられた、トタンばりの住居が目につく
しばらく街の景観を眺めていると、クレーターの下から、カウボーイのような姿の黒人の男が近付いてきた

「旅人がキャラバンか……変わった身なりだが、お前はなんだ？」

「一応旅人かな……あなたは？」

「俺はルーカス・シムズ、この街の保安官であり、市長だ。」

「私はアレクサンダー・J・スミスです。
ここから遠い西の彼方から来たのですが、食料が底を尽きそうでした……よろしければ、寝る場所をいただけないでしょうか？」

ルーカスさんは外界から来た私を、注意深く見つめている

先ほどルーカスさんは私を変った身なりと言った……アーマーの上に黒いトレンチコートを着た私の姿は、確かにこの街では浮いたように見える

この戦闘服は西海岸を出る時に、レンジャーステーションの廃屋から見つけたものだ

暗視装置付きのヘルメットもあるが、さすがにあれをかぶっていると物騒に思われるので、平時は腰にぶら下げている

「寝床くらいなら簡単に用意してやれるが、食料は金が無ければ買えない。

金は働けば稼げるが、お前はなにが出来る？」

「そうですね……銃の扱いには自信がありますが、物の修理もできません。

それから、医療技術もいくらかたしなんでいます。」

ルーカスさんは意外だったらしく、目を見開いて驚いていたが、やがて落ち着く

「なるほどな…だが実際に見てみないと、信用出来ない。

ちょうど浄水場のウォルターが、助手を探している。
お前はそこに行って、ウォルターを手伝ってやってくれ。」

どんな要求が来るかは分からなかったが、簡単そうな仕事で良かった
自慢ではないが、小さい時から機械やロボットをいじっていた私は、
機械の部品や電気系等に詳しい

この街では浄水場がとても大切な施設であり、浄水場が故障してしま
ったら、この街の営みは崩壊してしまうだろう
私は人々の役に立てると思い、浄水場へと移動していった

浄水場もまた、他の建物のようにお粗末な板で造られており、中には
オンボロの機械が大きな音をたてて稼働している
その機械の奥に、レンチを片手に作業服を着込んだ初老の男性がいた
おそらく、彼がウォルターという男のはずだ

「あなたがウォルターさんですか？」

「……つたく……ん？
おお、なんじゃ？」

ウォルターは作業を止めて汗を拭い、私の方に顔を向けた
やはり先ほどの保安官同様に、珍しい私の格好に目を丸くした

「保安官から紹介され、あなたの手伝いに来ました。」

「ルーカスが新入りを寄越すとは珍しいな。」

まあいい、猫の手も借りたいくらいじゃったからな。」

ウォルターは頭を掻きながら浄水場を見回すと、何かを思い出したようだ

「実はメガトンの水道管の圧力が下がってあってな、どこか水漏れが起きてるかもしれん。
ちよつと探して見つけたら修理してくれんか？」

「メガトンとは？」

「この街の名じゃよ、街の中央にある爆弾がその名の由縁じゃ。」

街の散策をしていないので分からないが、爆弾があるなんて物騒な話しだ

爆弾はいいとして、私は早速浄水場を出て水漏れ箇所を探す
いきなり探そうとしても見つからないので、浄水場前の手すりから
周囲をぐるりと見回した

私はその中で二カ所、水道管から水が漏れているのを見つけた
一つはこの街に入って来たゲート近くの水道管、もう一つは建物の
上に通された水道管だ

私は順次、水漏れ箇所をチェックしていき、修理していく
水道管はかなり痛んでいたが、二つともナットが緩んでいたことから、接合部から漏れていたようだ

あと一つを探そうとクレーターの下に歩いていくと、中央の汚れた水溜まりの中に、黒い大きな物体があった

私は信じられないその光景に恐怖心を覚えた

それは紛れもなく核爆弾であり、世界を今のような荒野にさせた忌々しい兵器だ

私は足早にその場を立ち去り、坂に造られた簡易な階段を上っていくそしてちょうど、右側のパイプに水漏れが見つかり、ナットを閉め直した

私は爆弾がある場所を避けて通り、浄水場へと戻る

浄水場のウォルターに全て直したことを伝えたと、感心したように頷いて、いくらかキャップをくれた

キャップとはもちろんコーラなどの瓶のキャップであり、何故かこのウェイストランドで通貨として、幅広い集団で使われているものだ
西海岸のNCRは独自の貨幣を流通させていたようだが、キャップに比べればレートが低い

私は貰ったキャップをバッグの中に入れ、ウォルターに礼を言う

するとウォルターは私のことが気に入ったようで、あることを提案してくれた

浄水場はいつも故障の危険があるため、修理のための部品がいつも不足しているのだという

ウォルターは私に、廃棄された部品を見つけて持ってくるよう、頼んできた

廃棄部品一つにお金も払ってくれるというので、私は快く承諾した

私はウォルターに別れを告げ、保安官に仕事を終えたことを伝えようとした

保安官はクレーター下の食堂で見つかり、隣の人と何か話していた

「ちょっと待ってくれ……ウォルターの仕事は終わったのか、スミス。」

「はい、水道管を修理するだけでしたので、簡単でしたね。」

”簡単”という言葉聞いて、保安官は小さく笑った

教育も受けられないこのウェイストランドでは、ナットを閉められないどころか、物の数え方も知らない者がいるくらいだ

「どうやらお前さんは役に立つ男のようだな。」

確かお前は、銃の扱いにも自信があると言ったな？」

「自分の身にかかるいざごさはそれで解決して来たから、多少の自信はあるよ。」

保安官は一度頷くと、この辺りの地図が大まかに書かれた紙を見せる

「レイダーは知ってるな……無法者のクソつたれ野郎だ。」

そいつらは先日俺たちが返り討ちにしたんだが、ここ……スプリング

ベール小学校で何か企んでるらしい。
強制はしないが、腕に自信があるなら行って奴らをぶっ飛ばしてきてくれ。」

規模にもよるが、組織で訓練を受けた私にはレイダーなど敵ではない
まして夜間や市街戦、建物内での戦いは私の得意分野だ

「分かりました、行きましょう。」

「本当にいいんだな……よし、武器に余裕が無かったら雑貨店で買うといい。」

保安官はそう言ったが、武器は西海岸より愛用する

ナヴァロに保管されていたライフルであり、消音器とスコープのついた優れものだ

後は接近戦用に、45口径のピストルとナイフがある

素人の略奪者集団など、これらで事足りるというものだ

私は保安官とも別れを告げ、街のゲートをくぐり出た

ウェイストランドの荒野は、今日も荒れている……レイダーたちが死ぬには、とっておきの日だ

メガトン（後書き）

感想およびご指摘お待ちしております！

小学校で拾った女性

メガトン近くのスプリングベールにたどり着いた…廃墟は本当にメガトンの目と鼻の先の場所にあった

廃墟から少し先に見える大きな建物こそが、保安官の言うスプリングベール小学校なのだろう

私は銃に弾が装填されていることを確認し、45口径を手にして移動しようとした…

その時、左側から妙な稼働音と軽快な音楽が聴こえてきた

私がそちらに目を向けると、信じられないことに、宙に浮かぶ鉄のロボットがいた

アイボット…こんな荒れ果てた東海岸で、誰が動かしているのだろうか？

疑問に思っていると、そのアイボットが音楽を流していることに気付く

それは私がかつて聞いていたような、戦前の愛国讃歌……私は親近感を感じたが、不安感も感じた

もし組織が逃げた自分を追い掛けて来て、このアイボットを通して見ているのだとしたら？

猜疑心からアイボットに銃口を向ける、しかしアイボットは私の存在など感知していないかのように、そのまま浮遊してどこかに行ってしまう

私は何をこんなに怯えているのだろうか？

組織はNCRとB・O・Sの手によって壊滅したではないか……生き残りがいたとしても、私のように個人ならともかく、あの規模で遠く離れたこの東海岸に来るはずがない

私は無理やり納得し、早足に小学校の廃墟へと足を運ぶ

崩れた壁を迂回しようとしたが、すんでのところまで踏みとどまる私はふところから小さな鏡を取り出し、崩れた壁から少しだけ出した

「1、2…3人か？」

鏡からはチンピラの格好をしたレイダーが三人見える

建物の死角にもいないとも言切れないので、おそらく四、五人いるはずだ

強行突破も不可能ではないが、内部のレイダーにバレることは避けたい……ではどうするか？

一人おびき寄せることにした

私は手ごろな小石を一つ掴み、反対側の壁に放り投げたレイダーたちがよほどのバカでもなければ、音に気付いてその原因を探りに来るはずだ

私はレイダーの足音を耳で確認すると、音を立てないように速やかに岩場に身を隠した

廃墟からは鈍器で武装した二人のレイダーが現れ、小石を投げた方向に歩いていく

私は素早く岩場から飛び出し、まず一人目のレイダーを、ナイフで刺し殺す

小さな音に気付いてチンピラは振り返ったが、私はそいつを地面に押し倒し、心臓を一突きに仕留める

その際声を発しないよう、空いた手で口を塞いだ
耳をすませて周囲をうかがう…幸い、物音は建物内のレイダーには聞かれなかったようだ

再度崩れた壁から中を覗くと、椅子にふんぞり返って居眠りをするレイダーが一人、アサルトライフルを持って外を警戒する者が一人だ
私は周囲を確認してから、ライフルを構える…撃つ瞬間に息を止めて手ぶれを抑え、引き金を引く

弾丸は狙ったチンピラに真っ直ぐに飛び、銃を持ったチンピラは窓から外に落ちた
すぐにもう一人のレイダーを確認する…居眠り中だ

無抵抗の者を殺すのは気がひけるが、これがこの世界の条理だ……
私は胸の前で十字をきってから、チンピラの首をナイフで斬り裂いた

剥き出しになった場所にいたのは、これで全てだったようだ
私はレイダーが落としたアサルトライフルを拾い、使えるかどうか
確認する

しかしその銃はところどころ砂塵が入り込み、状態の悪い物だったので、弾薬のみを回収した
そのまま立ち去ろうとしたが、この銃が悪人に渡ることを阻止しようと、銃を完全に破壊してからその場を去る

念のためもう一度外回りにレイダーがいないかを確認し、建物内部に入る
その時、外から入れる両開きのドアがあったので、そこから内部に
潜入した

まず最初に目に飛び込んで来たのが、天井に吊し上げられたり、壁に打ち付けられた惨殺体だった
目を覆いたくなるような残酷な光景の中に、大きな檻がある……その中
にあつた小さな白骨化した死体を見て、私は大きな怒りを感じた
毎日を必死に生きようとする者を、無慈悲に殺す悪党共……今日は
遠慮しない

私は暗視装置付きのヘルメットをかぶり、暗視装置を付ける
右手に45口径の拳銃を握り、私は小学校の奥へと進む

耳に聞こえるチンピラの下品な笑い声を頼りに進むと、角を曲がったあたりでレイダーに鉢合わせする

男は驚いていたが、私は迷うことなく男の首をナイフで斬り裂く

男は自分が何をされたのか分からないまま死に、死体が見つからないように、私は近くの部屋に隠す

さらに角を曲がった廊下の先にて、レイダー二人を発見する

私は暗視装置で彼らを視認しているが、彼らからは暗がりの私は見えないだろう

私は背のライフルを構え、素早く二人の頭を撃ち抜いた

壁に二人分の脳髓が飛び散ったのを確認し、再び耳を済ませる……

どうやらこの階層には、自分以外いないようだ

私はこの階の扉を片っ端から開き、部屋にあった使えそうな物資は残らずかき集めた

うち一つの扉は、小学校の下層階への扉だった

私は階段を降りて、次なる階層への扉を開く

残るレイダーは全員、この階層にいるようだ…複数の足音と話し声が聞こえる

私はその声のする場所に移動する…途中、残酷に吊し上げられた死体を見かけ、その鎖を緩めて床に下ろしてあげた

「おい、そこにいんのはだれだ!？」

「チツ……!!」

私は振り返りざまにナイフをレイダーに投げつける

ナイフは見事レイダーの胸に突き刺さったが、レイダーはピストルの引き金を引き、フロアに轟音が鳴り響いてしまった

さっきまで聞こえていた声が怒声に変わり、レイダーたちはドタバタと駆け回り始めた

「仲間がやられた！」

まだ近くにいたはずだ、見つけ出してブチ殺せ！」

「人影が見えたぞ、撃ち殺せ！」

レイダーたちは角に見える人影めがけ、ある限りの弾をぶちまけるやがて一人が異変に気付き、射撃を止めた

「なんてこった仲間の死体じゃねえか!？」

「なんだと、じゃあヤツはどこにいるってんだ!？」

レイダーがわめき散らしていると、彼らの後方から小さな物体が投げ込まれる

投げ込まれた物の正体に気付いた時には既に遅く、それは彼らの真
ん中で爆発した

レイダーたちは爆発に吹き飛ばされ、身体はぐちゃぐちゃになって
死んだ

私は物陰からゆっくりと姿を現し、彼らの死体を間近で見届ける
死にきれず低い声で呻く男の頭を撃ち抜き、私は十字をきる

もう気配は感じられないが、念のためこのフロアを散策する
めぼしい物はほとんど何もなかったが、一つだけ鍵がかけられた扉
を見つける

私は扉から少し離れ、鍵穴に向けて数発弾を撃ち込む
それから脚で蹴破って警戒しながら入ると、床に大きな穴があった

私は拳銃をリロードし、いつでも対処出来るように、銃を構えなが
ら前に進む
壁を板でしっかり補強され、坑道にも見えるが、まさか小学校に坑
道があるとは思えない

用心深く中を進んでいくと、カサカサと無数の音が聞こえてきた
アリだった……アリにしては大きすぎるが、この程度なら西でも見
てきた

アリはこちらに気付いていなく、わざわざ弾を無駄にする必要もない
私は踵を返してその場を立ち去る

そして小学校の上階に進もうとした時に、背後から近寄る気配を感じとつさにしゃがんだ
ヘルメットの上を刃物がかすり、私は前に転がって襲撃者と距離をとった

レイダーは距離をとった私を後ろから首を絞めてきて、私は腕と首の間に指を入れて抵抗する
私は正面の壁を蹴り、後ろから首を絞めつけるレイダーを壁に叩きつける

そして右腕の肘でレイダーのわき腹を殴り、怯んだところを床に投げ飛ばす
すかさずレイダーの首を押さえてナイフを手にするが、私は思いとどまった

「女のレイダー……か。」

女性はその鋭い目つきで私を睨み抵抗するが、私に押さえつけられて身動きがとれないでいた

「サッサと……サッサと殺しなよ！
仲間を殺したみたいにさ！」

噛みつかんばかりの勢いだ……私はナイフを構えたままだが、彼女の拘束を解いた

彼女は驚いていたが、上体をあげて怒りを露わにする

「なんで殺さないんだい……アタシが女だからか？
なめるんじゃないよ！！」

私は黙って彼女の言葉を受け止め、彼女が落ち着くのを待った
やがて彼女が叫ぶのを止め、私はようやく彼女の方を向く

「あくまで憶測だが、キミのその首についたあざは……つい最近まで奴隷だったのだろう？
もしくはそういう性癖なのか……。」

「なっ、やっぱりアタシのことバカにしてるんだろ！！」

ジョークを言ったつもりが、彼女を怒らせてしまったようだ
猛禽類のような鋭い睨みだが……残念ながら私には効かない
彼女はぷいっとそっぽを向いてしまい、私は困って腕を組む

「あんたの推測通りさ……アタシはついこの間まで、ずっと奴隷だったよ……。」

「だけどそれがなんなんだい、アタシに同情でもしてるのかい？」

「……奴隷だったとしても、レイダーに成り下がったお前に同情の余地はない。」

「あんた…ふざけてんの？」

殺し屋レイダーのアタシを生かしといて、何をしようっていつのさ！
…アタシを犯そうってかい？」

「……いや？」

冷静に返答を返す私に彼女は苛ついているが、真意の読めない私の態度に、だんだんと彼女の大人しくなった

「お前にチャンスやる。」

「…チャンス？」

彼女は疑問を浮かべる

「人生はやり直せる…例え悪事に手を染めようと、その罪を償って人々の役に立とうとすればな。」

「回りくどい言い方は嫌いだよ…はっきり言いな。」
態度と言葉遣いはともかく、彼女は私の言葉に耳を傾けてくれたよう
うだ

「お前がレイダーから足を洗い、残りの人生を真っ当に生きると誓うなら、命は救ってやる。」

「あんた…偽善者って言われなにかい？」

「よく言われるよ……だが成さぬ善より成す偽善、これが私のモットーだ。」

彼女は私のことを、変人でも見るかのような表情で見てくる
不条理な世界で私のような人間は異質かもしれないが、私はこの生き方を誇りに思っている

「嬉しい提案かもしれないけど…今さら違う生き方なんて出来ないね…。」

今までみたいに略奪暮らしする以外、アタシは何も知らないよ。」

「その若さで何を言っているんだ、人生はやり直せるんだぞ。生き方を知らないなら私が教えてやる。

どうだ、人生をやり直してみないか？」

彼女は俯いてしばらく考えた後、不安げに私を見上げてくる

「こんなアタシでも…街の人みたいに生きれるのかい？
あんたを…その…し、信じてもいいのかい？」

「ああ、信じる。

キミにその気があるのなら、私は全力でキミの手助けをしてやる。」

私が彼女に微笑みかけ…ヘルメットをかぶっていて分からないので、それをとってから微笑みかけた
彼女も不器用ながら笑ってくれ、彼女に手を差し出して立たせてあげた

「自己紹介しよう、アレクサンダーだ。
アレックスと呼んでくれ。」

「アレックス…う、うん…よろしくな。
えっと…アタシには名前が無いんだけど、良かったら付けてくれな
いかな？」

まさか名前まで無いとは驚きだ…私は考えようとしたが、真っ先に
思いついた名前を口にしてしまう

「ソフィア…ああ、ソフィーなんてどうかな？」

「ソフィーか…よく分からないけど、良い響きだよ。」

とりあえず彼女は名前を気に入ってくれたようで、その時は年相応
の明るい笑顔を見せてくれた

まだ人々の善意の心は無くなっていない
私は彼女を救ったことでそう確信した……西海岸である集団が人助

けしていたように、私もこの東海岸でそういった組織を作ってみた
と思った

それよりもまず、ソフィーを人々の中で暮らしていけるよう、いろ
いろなことを教えてあげなければならない

小学校で拾った女性（後書き）

一応、主人公紹介しておきます

アレクサンダー・J・スミス

男性、善人

装備

- ・レンジャーヘルメット
- ・レンジャー・コンバットアーマー
- ・消音器付き狙撃銃
- ・45口径ピストル
- ・コンバットナイフ

西海岸、ナヴァロ前哨基地出身、エンクレイヴ所属の父を持っていた正義感の強い青年

幼い時はエンクレイヴの教育で、国家至上主義・盲目的な愛国心を持っていたが、エンクレイヴがウェイストランドで行った数々の蛮行を見て、エンクレイヴの正義に疑問を持つ

15の時にNCRがナヴァロに侵攻して来たのを機に、住み慣れた我が家を捨ててワシントンDCに旅立つ

ウェイストランドでは限りなく珍しい善人であり、人々を救うことに生きがいを感じている

その反面、悪党どもには容赦なく弾丸を叩き込む

機械工学や電子工学などに優れており、ロボットや機械の修理は手のもの

銃撃戦や格闘戦も得意とし、レイダーも数人を相手に圧倒出来る

ミュータントではない

感想お待ちしております！

ちなみに主人公は、オリジナル勢力を作る予定です
西海岸と東海岸の技術が融合して、けっこう強い勢力になる予定です！

怪しい男

スプリングベール小学校のレイダー一味を壊滅させた私は、任務達成の旨をメガトンの保安官に伝えに行く

そういえば小学校で拾ったレイダー娘がいるが、小学校を漁って見つけた、傭兵服を着させた
チンピラの服装のままでは、メガトンに入る前にゲートの門番に撃ち殺されてしまうからな

彼女は人の中で暮らすには少し…荒れた人物ではあるが、私が責任をもってキチンとした人間性を育んであげなければ

メガトンに長く居座るつもりは無いが、この街で少しでも人に馴れさせてあげたいところだ

メガトンのゲートに向かうと、最初に面識があったおかげで、ゲートの門番は簡単に入れてくれた

「あんたメガトンの住人に信頼されてるのかい？」

「まさか…私はただの新参者だよ。」

「ただの新参者ね…そんなヤツがレイダーの拠点に侵入して、一人残らず皆殺しに出来るかい？」

まあ、アタシは生きてるけど。」

彼女は私を疑い深そうな目つきで見ている

まあ、彼女に私の生い立ちを話しても信じないだろうし、理解出来ないだろう

私は簡単な言葉でごまかして、メガトンの中へと入っていく

保安官はゲート近くの建物に寄りかかっていたので、直ぐに見つかった

彼も私を認識したようで、組んでいた腕を解いて近寄って来た

「生きて帰って来たことは、仕事を完璧に終えたか逃げ帰って来たのかのどちらかだ。

悪党共はみんな始末してきたのか？」

「ああ、一人残らず殺して来た…もう襲撃の心配は無い。」

保安官は注意深く、あるいは用心深く私を問い詰めてくる

私はそれに、小学校で始末した人数やその時の様子などを伝える

街の保安官を務める者であれば、これくらいの用心深さが必要かもしれないが…

どうでもいいがソフィーよ…そんなに街の保安官を睨むな、正体がバレるぞ

「お前は見た目よりタフな男のようだな…コイツは報酬だ。
無駄にするなよ。」

保安官は紐に通されたキャップを私に渡すと、ズイと顔を近付けて来た

「お前はとんだお人好しだ…あの女が問題を起こしたら、二人してこの街から出て行ってもらうぞ。」

どうやら彼女の正体は最初からバレていたようだ…ダテに保安官じゃない、感覚が鋭い人物だ
私が自信を持って頷いてみせると、保安官は私の肩を軽く叩いてクレーターの下に降りて行った

私は保安官の後ろ姿を見届けた後、呆れ顔で背後のソフィーを見つめる

「これから更正していくというのに、そんな態度でどうするんだ？」

「ルーカスには何度も殺されかけたんだよ。
それにアタシの仲間も何人も殺されたぞ!？」

私は反省しようとしないう彼女にげんこつをくらわせ、説教をする

私も昔は問題児ではあったが、この娘は私の全盛期を超えるかもしれない

まだ最初ということもあり、私は説教もほどほどにクレーター下の食堂に彼女を連れて行く

メガトンの住人のほとんどが、このクレーターの底辺で営業をする
ブラスランタンで食事を済ませる

そしてこの店を営業している三兄妹は、気さくな態度で住人たちから慣れ親しまれている

ただ弟の方はあまり良い噂は聞かないようだが、メガトンに来たばかりの私にはそんなことは知らない

この街で食事をするのが初めてとあって、少し期待しながら店の前に立ったのだが、ある物を見て私は不快感を露わにした
私が見ているのは点滅して、不規則に光る店の看板だ
その看板の文字は英語ではなく漢字…つまり戦前の共産主義国の文字だ

「なにやってんのさ。」

食べ物を食べに来たんじゃないのかい？」

「ああ、すまないな…。」

私は忌々しく光る看板から目を離し、店のテーブルの前に置かれたスツールに座る

ソフィーも同じように私の横に座り、私の横顔をチラチラ見てくる……よほどお腹がすいているのかな

「あら、もしかして噂の新入りさんかしら？」

店員らしき金髪の女性が私たちに話し掛けてきた

「そうだけど、どんな噂が立っているんだ？」

「保安官の話を聞いてた人がいてね、スプリングベールのレイダーを倒してくれた人って有名よ？」

噂が広まるのは早いものだ……いや、かなり早すぎる気がする
レイダーを倒して帰って来たのはつい先ほどだし、そのままこのクレーターを降りて来たのだから

「紹介が遅れちゃったわね、私はジェニーよ。
兄妹でこの街の食堂を運営しているの。
これからよろしくね。」

「私はアレクサンダーだよ、アレックスと呼んでくれ。
こちらこそよろしく。」

私は彼女と自己紹介を済ませると、隣のソフィーに目を向ける
ソフィーはソワソワしていて、やや落ち着きがない

「ほら、キミも自己紹介しなさい。」

「あ、うん……えっと、ソフィーだよ。
よ、よろしくな。」

何にそんなに緊張しているのか、ところどころ言葉を囁むソフィー
そんな彼女の様子ジェニーは微笑む

「可愛い娘ね。」

街を救ってくれたアレックスと、可愛いソフィーにサービスしちゃ
うわ。」

ジェニーは冷蔵庫を開けて、イグアナの丸焼きと奇妙な形の果実を
私たちにくれた

私は悪いと思ってお金を払おうとしたが、ジェニーは受け取ろうと
しなかった

私は彼女の厚意に甘んじ、お礼を言っていたいた料理を食べる

「この果物は…珍しいな。
何ていうんだ？」

「これはプンガフルーツって言ってね、最近ウエイストランドに流通したの。」

放射能の汚染も全く無いし、食べると健康になれるわ。ちよつと他のものより値がはるけどね。」

モハビやザイオンにはいくら汚染の無い食材はあったが、こんなに美味しくて、なおかつ汚染されていない食材は初めてだふと隣を見てみると、ソフィーがとても幸せそうな表情をして、プンガフルーツを頬張っていた

そしてプンガフルーツを食べ終わると悲しそうな表情をし、プンガフルーツが置いてあった皿を、暗い様子で見つめる

「…私のも食べるか？」

「い、いいのか…？」

食べかけでちよつと悪いが、私は彼女にプンガフルーツをあげるするとソフィーはとても嬉しそうにして、私に感謝の言葉をかけてプンガフルーツを食べ始めた

「彼女さんは食いしん坊ね。」

アレックスはお腹空かないの？」

「私は少食だから気にならないよ…それより、無料で貰って悪いな。」

「気にしないで、二人分くらい平気だから。
でも他の人には内緒よ?」

私はジェニーに頷いてみせ、残りの丸焼きイグアナをソフィーを眺めながら、頬張った

残った時間は街の中をぶらぶら歩き回り、ソフィーを住人たちに馴れさせることに勤しむ
街行く人々は私を見ると、レイダーを倒した話題で話し掛けてきて、気さくに声をかけてくれる

ただソフィーはそんな出来事に疲れたようで、だんだんと無口になっていってしまう

「アレックス…疲れた…。」

「ああ、ならそろそろ寝泊まりする場所を探さないとな。」

ソフィーがうなだれながら目をこすりはじめたので、街の探検はこれくらいにして、寝る場所を探すことにした

一応、共同住宅とかいう場所を見つけたが、明らかに人がたくさんいたので敬遠する

もう夜が近付いて来て、歩きながら寝てしまうソフィーを背負いながら、私は何軒か建物を見て回った

結局、いい場所が見つからず、たまたま私の姿を見たジェニーが寝る場所を提供してくれた

私はまだ眠くないので、ソフィーをジェニーに預けて再びメガトンを練り歩く

こうして警戒もせずにいられるのは、ずいぶん久しぶりだ

西海岸ではNCRの兵士を見てヒヤヒヤして、凶悪な野生動物と危険な接触もした

ここ東海岸に入るなり、ヤオグアイというクマの化け物に追われてデスクローに遭遇した時は死ぬかと思った

小さい時はベルチバードで空を飛ぶのが夢だったが、今は平穩を一番に願うようになっていた…

無意識にぶらついていた私は、メガトンのとある酒場に入っていた夜の時間帯ということもあって混んでいたが、一つだけ空いた椅子を見つけてそこに座った

「街を救った英雄に会えるとは、私はツいているな。」

「おっ……この席に他の人がいたなんて分からなかったよ。」

本当に気がつかなかった…白いスーツ姿のサングラスをかけた男に、私はこうして席について声をかけられるまで気付かなかった

「キミの噂は聞いたよ…素晴らしくタフな男らしいな。
おっと…私はM r . バークと呼ばれている。
以後お見知りおきを…。」

「アレックスという者だ…。
こちらこそよろしく。」

ウェイストランドの、このメガトンに住んでいるにしてはとても異質なこの男に、私は警戒感を払えない
私は礼儀正しく挨拶を交わしたものの、彼に対して一切油断も隙も見せなかった

そんな私にM r . バークは小さく笑ってみせ、ちょうど通りかかったグールに声をかけた

「ゴブ…ワインを一杯彼に渡してくれないかな？」

「は、はいM r . バーク。
少々お待ちを…。」

M r . バークは店員に注文した後、私の方を向いて口を開こうとしたが、何故か思いとどまった
そして背広の内側に手を入れてキャップを取り出し、テーブルの上に置く

「急用を思い出してね…すまないが、私の勘定をすませてもらいたい。」

Mr・バークは席を立つなり足早に酒場を出て行ってしまい、ちょうど入れ替わりに、ゴブという名のグールがやって来た

「あれ…Mr・バークはどこに？」

「彼は今さっき帰った…これは代金だそうだ。」

ゴブは困ったような仕草をしていたが、ワインを置いてキャップを回収して戻っていく

「不思議な街だ…。」

私は誰にともなくそうつぶやき、グラスに満たされたワインを口に含む

ほどよい酸味が口の中に広がり、私の中を渦巻いていた不快感をきれいさっぱり消してくれた

結局、酒に酔った私は今までの旅の疲れがどっと出て、朝までそのテーブルで寝ていたという…

怪しい男（後書き）

Mr. バーク：日本国の歴史的な事情から、日本版では消去されたキャラ：

感想、ご指摘お待ちしております！

ライダー娘を鍛えましょう（前書き）

今回は序の口…

軍団ができたら、まとめて…

フルメタル・ジャケットのあれをやりたいな（笑）

レイダー娘を鍛えましょう

スプリングベールのレイダー一味を一掃して以来、私にはメガトンの住民や保安官から、様々な依頼を請けるようになった

このまえのような、レイダーの本拠地に行つて皆殺しにしてこいなどという、難易度の高いお願いはしてこないが、私は頼まれた仕事を報酬の大小にこだわらずこなしていた

依頼のほとんどは大したものではなく、巨大ゴキブリや街の外壁近くを彷徨く、モールラットという変異したネズミの駆除などをしているまれにサソリのミュータントも駆除するが、ここらにはあまり出没しなく、今日もモールラットの駆除を行っている

変異して大きくなったとはいえ、西海岸で危険な生物と渡り合った私には脅威ではなく、弾丸を使うまでもない

ただ噛まれると痛いので、モールラットの牙には注意して、ナイフで一匹ずつ仕留めていく

モールラットも毎日のように私に狩られ、住処を変えたり私を見ると逃げたりする

私がこうして駆除するのは、命知らずで頭の悪い個体ばかりだ

「アレックス、こつちも仕留め終わったよ。」

「ご苦労さま、とつた肉は私にくれ。」

無造作に投げられたモールラットの肉を掴み、先ほど私が削ぎ落とした肉を入れた箱にしまう

モールラットの肉は野生動物の中でも、屈指の不味さだとして西部でも有名だったが、食糧難の東海岸ではこんな肉も食べなければならぬらしい

他の肉より売値は低い、少しの稼ぎにはなるので無駄にしないようにしている

「ハア…今日は追い回しすぎて、ちょっと疲れたね…」

ソフィーは私が寄りかかる岩に腰掛け、荷物から水を取り出して口に含む

この水は、私がそこらの水溜まりから精製した水であり、放射性物質や泥などのないきれいな水だ

水を精製するのは蒸留によるものであり、小型の蒸留装置を持っているので、私たち二人分くらいならなんとかなる

「…フウ…純粋な水ってこんなにも美味しいんだね。」

「むやみやたらに飲むなよ…。
ん、足怪我したのか？」

ふと彼女に視線を移した時に、彼女のズボンが破けていて、そこか

「少し血が流れていた
ソフィーはモールラットに引っ搔かれたと言い笑ったが、私はすぐに治療すると言った」

「こんな荒れた地で野生動物に傷を付けられたら、そこから悪い細菌が入って、最悪の場合には死ぬ可能性だってある」

「ソフィーはありがた迷惑な表情をしていたが、私はかまわず彼女のズボンをあげ、ウイスキーの瓶の栓を外す」

「少ししみるぞ。」

「あ、ああ……痛っ……！」

「ウイスキーで傷口を消毒すると共に、傷に付着した土や砂も洗い流す
ソフィーはアルコールが傷にしみる痛みで顔をしかめるが、動かす我慢してくれた」

「後は化膿止めを傷口に打ち、持っていた清潔な布で傷口を保護する」

「たかがかすり傷で大げさじゃないか？
この程度の傷で、アタシはくたばったりしないよ。」

「可能性は0じゃないんだ、治療するにこしたことはない。
私はそう言っていたヤツが三人ほど死んだのを見た。」

「アタシはそいつらより、タフな自信があるけどね。」

自分は頑丈だとアピールしてくるが、どうだか…

私が言ったことは嘘ではないし、彼女のように治療を怠り伝染病にかかった人間をよく見てきた

西海岸より汚染が酷く、環境の悪いこのワシントンでなら尚更だ

ここ最近ソフィーの人間性を育てて来たが、そろそろ生き延びるためのサバイバル術を教えこもうではないか

害獣駆除を手伝う彼女を見て来たが、動きに無駄がありすぎる

元レイダーだった性が、彼女は武器を振り上げて真つ正面から突っ込んでいってしまう

まだ弱い野生動物だから通用するが、これが武装した人間だったり、デスクローなどの獰猛な動物に出会ったら間違いなく死ぬ

空を見上げれば、まだ日は傾いていなかった……ソフィーを連れて少し遠出してみよう

「あそこにデカイアリがいるが…お前ならどう対処する？」

私はメガトンから少し離れた岩場にやって来ていた

私の指し示す方角には、ジャイアント・アントが脚を忙しく動かしている

「突っ込んでいって、鉄パイプで一発殴ってお終いさ。」

予想通りの回答だが、ここまで予想通りだと物凄く悲しくなる

「アリは基本的に群生だ、この場合は先ず周囲に他のアリがないか確認する。」

私はナイフを構えて岩場から覗いたり、アリの立てるカサカサという足音に聞き耳を立ててみせる

「他に仲間がいないと分かったら、背後から静かに近付く……。」

私はアリの死角に入り込み、しゃがんだ姿勢で音を立てないようにアリに接近する

そしてアリの胴体をナイフで刺し貫き、続いて胴体と頭部を斬り離す

「攻撃を覚悟しているかしてないかで、ダメージはだいぶ違ってくる。」

人間も動物も、意識の外からの攻撃に弱い……隠密は重要な要素だよ。」

「戦前の軍隊みたいだね、難しそうだけどやってみるよ。」

聞き分けがいいようで助かる…私はもう一匹のアリを探し出し、ソフィーに仕留めるよう言った

彼女は私がしたように周囲の様子を探り、他に足音がないか聞き耳を立てる

私は他にも気付いた点があったが、ソフィーがどう動くか確かめるため、あえて黙っておいた

ソフィーは慎重にアリに近付いていく…初めてにしては上出来だ

いよいよアリに近付くというところで、彼女には予想外の出来事が起きる

最初に狙っていたアリの後方の岩場から、もう一体のアリが現れた
岩場に隠れていて、なおかつ動かなかったことで、足音が聞こえなかったのだ

私は万が一に備えてピストルを抜くが、ソフィーは動揺しながらもいきなり現れたアリの頭をナイフで刺し仕留めた

それから気付いていないもう一匹のアリを、背後からナイフを刺した

二匹目は慌てていたためか一撃で仕留められず、ナイフを刺されたアリが暴れ出す

予想外の出来事に対応出来ずナイフを離してしまい、アリは怒ってソフィーに襲いかかる

さすがにそこは、私が助け舟を出す

アリの頭部を思い切り踏み潰し、尻餅をついて転ぶソフィーに手を差し伸べる

「焦ったのはマズかったが、最初に飛び出してきたのを仕留めたのは正解だ。」

二匹目はまだお前に気付いてなかったからな。」

「マジでヤバかったよ…とりあえず助かったよ。」

よほど焦っていたのか、私の手を握り返した彼女の手は震えている

「やり始めたにしては本当に上出来だ。さ、訓練を続けるぞ。」

「な、なんだって!？」

今日はもうお終いじゃないのかい!？」

彼女は嫌な顔をするが、そんなのはお構いなしだ
まだ日は暮れる時間ではないし、訓練出来る時間も対象もたっぷりあるはずだ

「今日は私が認めるまでやってもらうぞ？」

ふざけたり手を抜いたりしたら、日が暮れても訓練は続けるぞ。」

「今日一日で出来るようになるはずないだろ！」

この鬼、悪魔！」

「ならお望み通り、鬼教官になってやろうか？」

軍曹によくしごかれたから、お前にも同じようにしてやれるぞ？」

地獄がこの世かあの世にあるか分からせてやる。」

拳をベキベキ鳴らす私を見て、ソフィーの顔がひきつく

ここまで怯えてくれると、そういった嗜好でなくても加虐性をくすぐられる

その後、彼女は反抗した罰として私の指導のもと、過酷な訓練を受けることとなる

私が幼い時に組織から受けたスパルタ訓練を、そっくりそのまま彼女にしてやったのだが、あまりの過酷さに彼女は涙を流して必死になる

まあ、泣いたくらいでやめる私ではないので、その後も彼女を訓練と称してシバきたおした

そのおかげで訓練を終えた後、彼女の機嫌を直すのに一苦労したわけだが…それはまた別の話だ

レイダー娘を鍛えましょう（後書き）

後々、主人公はタロンシャダー！と同じように傭兵軍団を組織しますが、本拠地にする物件を探しとります

今のところの候補は二つ

- ・ジャーマンタウン警察本部
- ・コンスタンティン砦

コンスタンティン砦は遠いですが、ロボットや戦前の技術を使える

ジャーマンタウン警察本部は、エリアのほぼ中央に存在するため、傭兵業をやるには地理的条件がいい

警察署のSM駆逐もあるので、話しのタネがあります

さてどっちにするか…

他にもよい物件がありましたら、是非教えて下さい！

賞金稼ぎたち

「いつまで不機嫌でいるんだ？」

「知らないよ……！」

やり過ぎたなど、私は彼女を背に背負いながら心の中で呟いた

隠密行動から始まり、射撃術や格闘術の訓練を彼女に叩き込んでやったのだが、私のスパルタ教育はちよつと彼女には酷だった怒鳴る私に涙目になって怯え、訓練も泣きながら行っていた：

しかし泣きながらも、私の訓練を受けて確実に進歩する彼女は、素直に褒め称えられる一通り訓練が終わり、彼女にその旨を伝えてやったのだが、キレて不機嫌になってしまった

筋肉痛で動けない彼女は私に背負われているが、私の問い掛けを無視したりして、小さな反抗を続けている

日も傾いてきたのでメガトンへ帰ろうとした時、私たちの耳に複数の発砲音が聞こえた

私はとっさにかがんで岩場に身を隠したが、発砲音が継続していることから、私たちを狙っているものではないようだ

「見に行こうよ、アレックス。」

「よし…念の為此はお前が持っていてくれ。」

45口径の拳銃を彼女に手渡し、私は発砲音の聞こえる方角へと移動する

警戒しながら進んでいくと、今度は爆発音が響き渡った…大きな戦闘が起きているようだ

農場の跡地のような場所の岩場に隠れ、私は戦場をゆっくり慎重に観察する

なにやら黒いコンバットアーマーを装備した男たちが、遮蔽物に身を隠して、とにかく前方めがけ発砲をしていた

双眼鏡を取り出して彼らの狙う先を見ると、黒い戦闘服にガスマスクを装着している男が応戦している

彼は一人だが慌てているわけでもなく、時折遮蔽物から顔を出す敵に発砲しているだけだった

「レイダーには見えないが、傭兵か何かか？」

「複数いる方は、タロン・カンパニーっていう傭兵集団だけど…あつちの一人のやつは分からないな。」

あつ…あれを見てくれ！」

彼女が身を乗り出して指差した方を、私も双眼鏡で覗いてみる
タロンの傭兵たちの背後から二人組が忍び寄っていた

一人はグールで変わった服装に大きな刃物を持っているが、もう一人はさらに異様な出で立ちだ

鈍い銀色の鎧：中世ヨーロッパの騎士が装備するプレートアーマーに、戦前の消防士が使うような斧を持った人間だ

彼らは黒い戦闘服姿の男に釘付けの傭兵に接近すると、雄叫びをあげて傭兵たちに襲い掛かる

奇襲を受けた傭兵たちはなすすべもなく、彼らの凶悪な刃物に引き裂かれた

そこに黒い戦闘服の男が合流し、何やら会話を始めた
どうやら仲間のようだ…

「あんなやつらここにいなかったよ。
もしかしたら、DCの方から来たのかもな。」

「特殊部隊のような男に、鎧姿の大柄な人間に…よく分からないグール。

面白そうだ…。」

「ちよっ、どこ行くのさ!?!」

無論、彼らに接触するのだ

彼女は背中では反対しているが、あいにく彼らにはソフィーの叫び声に気付いている

戦闘服姿の男が一瞬警戒したが、ソフィーを背負って両手のふさがる私を見て、危険でないことを悟る

「タロンの傭兵じゃないな……ミハイル、ヤン。」

戦闘服姿の男は両側の仲間付近の警戒を指示し、ガスマスクを着した顔を私に向けて来た

彼は腕を組んで、私が背負うソフィーを睨むように見つめる
睨み返すなソフィー…

「発砲音が聞こえたと思ったら、君らを見つけてね。
気になったから来たのだが…。」

「オレがホルスターから銃を引き抜いて、お前の頭を撃ち抜くことは考えなかったのか？」

彼は私を試すかのような問答仕掛けてきた

まあ、深く考えているつもりはない…8割勘で彼らに接触したのだ

「正気かお前…そんなんで、よく今日まで生きてこれたな。」

「こう見えて、修羅場はかなりくぐってきたんだ。」

だいたい勘で分かるんだよ。」

彼は重そうなアサルトライフルを肩にかけ、呆れたように首を振った

「オレはニコライ・カラシニコフ…傭兵じゃないが、命を奪って金を稼ぐような男だ。」

「アレックスだ、あいにく私も似たようなものだ。」

私は彼の差し出した握手に快く握りかえした

名前からしてロシア系の名前ではあるが、風変わりな戦闘服にガスマスクとは、珍しい格好だ

レンジャーアーマーの私が言えたものではないが…

彼は私の疑念に気付き、ガスマスクをコツコツ叩く

「仕事柄、顔を覚えられないよう隠している。

マスクは古い米軍基地で見つけて、この服はDCの警察署で発見した。」

彼はその戦闘服が気に入っているのか、私に見せてくれた

背中にはかすれた文字があり、”SWAT”と書かれていた

警察署にあったと言ったのだから、おそらく戦前の特殊部隊のものだろう

私は関心して頷いたが、ソフィーの存在を思い出して振り返る

「アタシはソフィーって言って、アレックスは保護観察員だよ。」

ソフィーは私の教えを守って、ニコライに元気よく自己紹介をしてくれた

保護観察員とは引つ掛かるが、ここまで成長してくれたのだらか今は不問にする

「ならこっちの仲間も紹介しないとな。」

ニコライは周辺の警戒をしていた奇抜な格好の二人を呼び、それぞれ自己紹介をさせた

「オレはミハイル、ニコライとはガキの頃から腐れ縁よ！好きなのは酒に賭博に殴り合い、嫌いなのはタロンと難しい話しだ！そういうやつは斧かこのチェーンソーでぶった斬ってやる！」

私のこのミハイルへの印象は、ミュータント並みに大きい身体に甲冑を着た、やかましい男だった

その甲冑は、DCの博物館で盗んだものらしく、それにコーティングを重ねて強固な装甲に改造したらしい

まるで終末世界の悪党を具現化したような男だが、この男は根は悪くないと判断した

そしてもう一人の男は、背筋をピンと伸ばし手を後ろで組んだグールだ

そのどこことなく中華風の香りのするグールは、自分の番だと知ると一つ咳払いをした

「ワタシの名はヤンね、苗字はなんだたか忘れたヨ。

エト…とりあえずアメリカと日本大好きネ、でも中国は爆弾でワタシたち容赦なくふとばしたから、大嫌いネ。

ワタシこう見えて、戦前はニューヨークで中国武術教えてたヨ。これはワタシの国の、青竜刀ネ…よろしく頼むネ。」

戦前のしかも中国人とは驚いたが、共産主義者ではないようだししかも中国武術の使い手とは、少し興味が引かれる

私もソフィーも彼らに自己紹介をし、彼らと握手をかわした

余談ではあるが、ソフィーはグールを差別しない人間のような元奴隷の彼女には、何かしらの想いがあるのだろう

「傭兵じゃないのなら、君らは一体何をしているのかな？」

「賞金稼ぎだ…懸賞金の掛けられた人間を殺したり、ミュータントやモンスターを殺していた。

今はタロンと一悶着あって、DCから撤退してきたんだ。」

「DCからか、あそこは危険な場所だと聞いている。」

「危険なんてもんじゃない、あそこは戦場だ。」

スーパーミュータントと、タロン・カンパニーが四六時中撃ち合いをしているよ。」

「スーパーミュータント？」

私はニコライの言ったその名前に、違和感を覚えた

スーパーミュータントはもちろん知っているが、あれは西海岸のある軍事基地で創られたおぞましい存在だ

あれがこの東海岸にまできるとは、にわかに信じられない

「恐ろしいやつらさ、やつらはどこからか大量に現れて生きた人間を殺すか攫っていくんだ。」

どちらにしてもDCに入るなら、弾丸は自決用に一発残しておいたほうがいい。」

「そうネ、アイツらグールに興味無いみたいだけど、とりあえず撃てくるヨ。」

「オレは前に一回、やつを素手で殴り殺したことがあるがな！
フワハハハハ！」

三人の評価はそれぞれだが、ほとんどがスーパーミュータントを脅威と認識している

ミハイルは自分の力に自信があるようだ…彼がその甲冑をとらなければ、ただのミュータントにしか見えないところだが…

「ところでアンタら、これからどうするんだい？」

地べたに座っていたソフィーが三人に尋ねる

ニコライは少し考える素振りをみせたが、やがて首を横に振る

「目的は無いな…傭兵稼業でもやればいいが、三人ではどうにもならないし…タロンには目を付けられている。

しばらく放浪の旅か、レイダーにでもなるかだ。」

「ふうん、そつか。」

ソフィーは適当な相づちを打つと、何故か私の方をジッと見て来たしばらくは無視していたが、石を投げて来たので諦めて彼女に振り向く

「アレックスさ、そんなに強いんだから傭兵でもやればいいじゃん。」

「何故そうなる？」

「ここらじゃマシな傭兵つて、数えるくらいしかないんだ。

タロンは腐ってるし、報酬泥棒の傭兵も多いんだ。

アレックスみたいなちゃんとしてて、強い人間が傭兵を組織したら、ウェイストランド中の人間から頼られるんじゃないか？」

傭兵だなんて、西海岸を出た時には微塵も考えていなかった
しかし彼女の言うことも、一理あるかもしれない

ここヴァージニア州には、カリフォルニアのNCRのような大きな
社会は無いし、法も秩序も無に等しい

人々はそれぞれ武装して自衛をしているが、本格的なレイダーやス
ーパーミュータントに襲われたら、ひとたまりもないはずだ

タロンはあまり好まれなく、報酬泥棒なので、実質まともな傭兵は
いない……もし自分が傭兵稼業を営んだとしたら、組織での知識を
活かして強大な勢力を築けるだろう

そして最終的には、NCRのような”国家”と呼べるような軍団に
まで、発展させることも出来よう

「アレックスにはその力もあるんだし、思い切ってやったらどうだ
い？」

ニコライたちも手伝ってくれるよ。」

「おい、ちょっと待て。

オレたちは一言もそんなことを言っていないぞ。」

当然のごとくニコライがつっこむが、ソフィーはキョトンとしている

「ヘッヘヘ、傭兵稼業か……面白そうじゃねえかニコライ！」

「面白くはナイけど、ソフィーさんの考えイイネ。
ここは一つ、お互い手を組むのもイイ考えアルヨ。」

甲冑男のミハイルとヤンは乗り気らしく、肯定的な答えだが、そもそも私はまだやると言っていない

「そうだな…単独で動くにはキツくなってきたところだし、自分の能力も活かせる。
オレもその考えにのってやろうじゃないか。」

とうとうニコライも傭兵稼業参加を表明してしまい、彼らは私を置いて、勝手に盛り上がる

「ただし部隊長はごめんだ…アレックス、お前がやれ。」

「だから私はやるとは一言も…ハア、分かった。」

私がここでやらないと言ったら、彼らは怒るだろう…厄介なことになってしまったが、乗りかかった船だ…最後まで責任を持ってやろう

「だが傭兵をやるには、拠点になる場所と兵器を持っていないとまらないぞ。」

「拠点は後で探せばいいが、兵器は任せる。
DCの中だが、いい場所がある。」

彼は胸ポケットからDCエリアの地図を出し、地図の一カ所を指差すニコライDCを抜け出す前に、そこに多数の兵器を隠したらしい戦場で手に入れた銃火器から、戦前の軍用兵器までが揃っており、それらを確保出来たならすぐにも行動出来るだろう

「へへへ、地獄の戦場に逆戻りってか？

ツシャアアア！！」

悪党のような笑い声をこぼすミハイルは、チェーンソーのエンジンをかけて雄叫びをあげる

ソフィーに似て好戦的ではあったが、同じく脳筋ぶりも同じだ

「悪いやつじゃないんだが…たまに、有り得ない程バカになるんだ。」

「気にするな。」

賞金稼ぎたち（後書き）

拠点についての感想ありがとうございます！

以前に挙げた二つ以外にも、候補が無いかウエイストランドを探しています！

ちなみに、この作品は一部New Vegasの武器も出ます
それからゲーム中に出ない銃器も出ますので、ご了承ください

ユニーク品は、たぶん出ません

ダウNTOWN潜入（前書き）

ミュータントと初接触

ダウンタウン潜入

ニコライ、ミハイル、ヤン…なぜか彼らと私とで傭兵稼業を始めることになってしまった

しかも私がその部隊長を務めることになるとは、まさに予想外の出来事だった…

しかしやるからには、中途半端にやるつもりはない…このキャピタル・ウェイストランドで最も強く、強大なコミュニティに発展させてみせる

私にはそれを可能にする知識を持っているし、脱出前に組織から抜き取ったデータが…戦前と戦後二百年の技術が、私のこの荷物に入っている

技術を活かすには機材と人員が必要だが、いずれ西部で最高を誇ったテクノロジーを、この地で実現させてみたい

それはさておき、ポトマック川を南下していたところ、ある建物を目にした

ペンタゴン…戦前の、アメリカ陸軍省の本部が私の目の前にある
ペンタゴンは幼少期に大人たちから少し教えてもらい、この東海岸に来る際に、ぜひ一度見てみたいものだった

永い年月を経ての損傷はあったが、ペンタゴンは昔のままの姿で残されている

「ここを拠点にするつもりか？」

ペンタゴンの前で足を止めていた私に、ニコライが低い声で尋ねてきた

「いや、陸軍省の素晴らしい建築物に見とれていたただけだ。それに、拠点にするにはあまりにも大きすぎる。私たちでは維持出来ないだろう。」

「おそらく戦前の技術が手付かずであるだろうな。あんたがそう言うなら、ペンタゴンはなしだな。」

ここワシントンで、これだけ外壁がしっかりした建物は珍しく、要塞にするには良い物件だ
しかしこれだけ大きいと、維持するにはより多くの人員が必要だ……だがもし傭兵の規模が大きくなったのなら、このペンタゴンを拠点にするのも良いだろう

私は名残惜しくペンタゴンを離れ、首都の廃墟へと続く、メトロへと移動していった

ワシントンDCのダウンタウンは、核戦争の破壊を免れることが出来たが、崩壊した建物は少なくなかった

風化による建物の倒壊などもあり、首都を自由に行き来することは困難となった

その代わりに、首都の地下に張り巡らされたメトロが、現在首都内部に入る基本的な道となった

複雑なメトロの道は初めて訪れる者を迷わすが、熟練者のニコライたちのおかげで、私とソフィーは迷うことなく進むことが出来ている

薄暗く足下に瓦礫が乱雑し、生ぬるい湿つばさがあり、このメトロに入って早くも不快感を感じていた
ソフィーもメトロに入るのは初めてのようで、顔をしかめて転ばないよう進む

「アイヤー、なんかいるヨ。」

先頭に行く中国人グールのヤンが、何かを発見したようだ
私を含む一行は武器を構えて暗がりにも隠れ、メトロのホームに視線を向ける

ヤンの言う通り確かに何かがいるようで、人型の影が見える…

「…あれがスーパーミュータントだ、アレックス？」

「ああ見ている…なるほど。」

屈強そうな骨格と肉体に、緑色の皮膚…確かに私が西で見たスーパーミュータントと酷似し、西同様人類の脅威になりそうな輩だ

しかし西のミュータントとは少し違うようで、獰猛な唸り声をあげ、単調な行動をしている姿からは知性を感じられない
西のミュータントにも知性の欠如した個体もいたが、こちらのミュータントとは比べ物にならない…

私たちが様子を見てみると、ミュータントは周囲を見回し、ズルズルと何かを引きずりながら姿を消した

私たちは気配が消えたのを感じ取り、ホームの上階へと上がる
一部崩落した天井の瓦礫が散らばり、本来二つあるはずのホームの入口は、瓦礫によって一つを残すのみとなっている

「アレックス、これを見てもろ。」

ニコライが地面に残された跡を指差す
暗所でそれが何なのかは分からなかったが、近寄ってみて、それが引きずられて出来た血の跡だと気付く
床についた血はまだ新しく、メトロから外界へ出る道にずっと続いていた…

「さっきのミュータントが引きずっていたのは、人間のようだな。」

人間に強い敵意を抱くスーパーミュータントの性質から、私は冷静に分析する

「ダウンタウンの廃墟にヤツらはうじゃうじゃいる。
ヤツらに対処出来るよう、お互いカバーし合って行こう。」

私よりニコライの方が、ここダウンタウンをより知っている

私が部隊長とはいえ、経験を持つ彼の提案を聞き入れた方が賢明であろう

外は夜：ミュータントに見つからないよう行動するには、とても良い条件だ

私は暗視装置付きヘルメットを装着し、愛用のライフルを手に装備する

ダウンタウンでの激戦を覚悟し、私たちはメトロの出口に向かって行く

暗いメトロから階段を上がっていくと、核の破壊を免れ、今なお残る建造物が出迎える
やはりほとんどが劣化・損傷し、ビルの下には一部瓦礫が散乱してあった

首都の荒廃ぶりに嘆く私だったが、そんなひまもない…私は建物の壁にそって進むニコライの後に続く

ニコライはそのまま進んでいったが、ちょうど壁の端で足を止める

彼は壁からそつと向こう側を覗くと、私に向けて指を三本立てる……
スーパーミュータントだ

避けて通ればよいのだが、武器を隠したのはミュータントのいる
通りのようで、ミュータントをどうにか排除しなければならないよ
うだ

「アレックス…敵は銃を持っていないようだが、それでもヤツらは
恐ろしい。
あそこにはいい隠れ場所があるが、狙えるか？」

ニコライは反対側の放置された車を指差す

「任せろ、1マイル先のレイダーも狙撃出来る。」

「それは頼もしい、行くぞ部隊長。」

ニコライは仲間のミハイルに目配せをし、暗闇に紛れて反対側の車
に素早く移動する
車からミュータントたちを覗いてみるが、ヤツらは私たちの存在に
気付いていない

「誰でもいい、一匹仕留めてくれ。」

銃を持っていないヤツらは突っ込んでくる…そこを、ミハイルとヤンが奇襲攻撃をする。

あんたの連れは…大丈夫だな。」

見ればソフィーはかなりノリノリの様子で、戦前の野球選手のように、バットを構えてその時を待っている

「何をしているんだ？」

すでに弾丸の入っているマガジンを外し、別のマガジンをセットした私にニコライが尋ねる

「”徹甲弾”だ…こいつなら、ミュータントの堅い皮膚も簡単に貫ける。」

「そんなものこゝらで流通していないが…使えそうな弾丸だな。」

車に身を隠しながら照準器を覗くと、ちょうどミュータントの一体が私の方を向き、とても狙いやすい位置にいた

私は廃車に体を密着させ、一切の手ぶれを抑える…そしてミュータントの頭部を狙って引き金をひく

一直線に放たれた弾丸は見事、ミュータントの目と目の間を貫き、ミュータントは血を噴出させて後ろに倒れた

ミュータントはこちらの存在に気付き、大きな雄叫びをあげながら、武器を振りかざして走りだした
私とニコライで走ってくりミュータントを撃つが、ヤツらは銃弾をものためせず突然してくる

「ミハイル！」

「ハッハー、くたばれミュータント！」

合図を出すとミハイルが壁から飛び出し、走って来たミュータントの頭を斧でかち割る
その勢いでもう一体のミュータントを柄で殴りつけ、わき腹に尖った斧の先端を打ちつける

「キエエエイ！」

ヤンおじさんの技を、くらっあるヨー！」

飛び出したヤンが剣を振り落とし、ミュータントの首を斬り落とす…
首を失ったミュータントはふらつきながら倒れ、地面にはおびただしい血が流出した

「よっしゃアタシも…ってあれ？」

「ヘッヘヘヘ、残念でした。」

獲物はオレたちがいただいたぜ。」

バットを持って飛び出したソフィーだったが、既にミハイルとヤンが片付けた後だ…

好戦的な彼女は戦えなかったことを不満に思い、長身のミハイルを見上げるように睨む

私たちは周囲に敵の気配が無いことを確認し、ニコライの隠された武器貯蔵庫に向かう

荒廃したダウンタウンの通りに面する、他の建物同様、かなり痛んだ建物に私たちは入る

建物内はかなり荒らされているが、ニコライはそれらを意に介さず、レジ近くの床に膝をつく

彼は腰のナイフを抜いて床の小さな区切れ線に刺し、床を覆う板を引き剥がす

その下には縦横1mほどの、重厚な金属の扉があった

彼は立ち上がると、レジの上のターミナルにパスワードを入力…金庫のキーを解除する

「嚴重なロックだな。」

「最終的に、この鍵がなければ開くことは出来ない。
パスワードと鍵のどちらが欠けても、この金庫は開かないんだ。」

ニコライは荷物から取り出した鍵を、金庫の鍵穴に差し込む
鍵を回した時にカチツと気持ちの良い音が鳴り、彼は鍵をしまって
金庫の扉を開く…

扉の下には階段があり、暗闇の奥へと続いている

ヤンを見張りに残し、暗い道をライトで照らしながら、私たちは進む
再び金属の扉に出くわしたが、今度は鍵穴やターミナルではなく、
ダイヤル式の扉だった
しかしニコライは戸惑うことなくダイヤルを回し、あっという間に
鍵を解除する

そして重い金属の扉を開いた先に、私たちの求める物はあった

奥行きのある部屋に多くの陳列棚が並び、そこに大量の銃器が置か
れている地下空間が、銃器を劣化させる様々な要因から防いでいた
ことで、ここにある銃器のほとんどが状態の良い物だった

私は壁に立てかけられた銃を一丁手に取り、様々な角度から観察する

「戦前、この場所は単なるミリタリーショップだった。
実際はワシントンを拠点にしていた、武器密輸業者のアジトだった
んだ。」

「ちなみに、オレとニコライはその密輸業者の子孫だ！
だからこの場所と鍵の解除を理解しているんだ。」

戦前の武器密輸業者の子孫とは、驚嘆に値する事実だ
戦前の犯罪組織の子孫が、特殊警察部隊のアーマーを着ているとは
なんとも皮肉なものだ

「銃器を見るのもいいが、これを見てくれ。
あんたなら、これがいかに重要な代物か分かるだろう?」

ニコライは部屋の中にあつたターミナルを開き、画面に映し出された設計図を見せてくれた

「銃の設計図に…弾薬の製造法か。」

「そうだ…スカベンジャーから質の悪い銃を購入するより、これを利用して真新しい銃を製造した方がいい。
今はまだ難しいが、将来的にかなり役立つだろう。」

確かに今の状況で銃を製造する余裕はないが、いずれ組織の規模が大きくなり、自分たちで銃を造れるようになればさらに強大な勢力になれる

西海岸では既にこういったことをしている勢力もいたし、ニコライの知識があれば出来るはずだ

「データを渡すが、奪われそうになったら破壊しろ。」

複製は出来るから安心しろ…他人に見られたらまずいからな。」

ニコライは念をおすように言うと、ターミナルの設計図を書き写したデータを私に渡す

「おいミハイル、いいかげんその……西洋鎧とやらを脱げ。」

「ニコライ…この鎧を何だと思っている？」

大昔の、かの神聖な十字軍の鎧を模した鎧だぞ？」

「どうでもいい。」

いちいちやかましいんだ、いいから脱げ。」

ニコライに言われ渋々鎧を脱ぎ捨て、トランク内のメタルアーマーを着用する

どうやら彼にとって金属の質感は無くてはならないものらしく、装甲の具合を確かめて気合いをいれている

さらにトランクから妙な被り物を引っ張り出し、それで頭をすっぽり覆う

「やっぱりこっちの方がいいぜ。」

「ウェイストハウンド…もつただのレイダーにしか見えないぞ。」

凶悪そうないでたちに斧とチェーンソーを装備し、それらを軽々しく振り回すミハイル…本当に、典型的な世紀末の暴徒にしか見えない

その後、私たちは持てるだけの弾薬と銃を回収し、再びその武器貯蔵庫を封印した

対物ライフルやアサルトカービン、ショットガンなどを持ち出したが、中には迫撃砲や無反動砲など……戦前の高威力の兵器も回収した

西でもあまり使われていないこれらの強力な兵器は、後に私たちが傭兵として動くにあたり、強敵を打ち破る頼もしい兵器となる

ダウントウン潜入（後書き）

B・O・Sと紛争フラグを立てました

しかし西のB・O・Sならともかく、東に来たB・O・Sとは互角に戦えそう

巨大ロボットが出たら終わりですが…

キャラの能力値などは後で書くとして…

一つ困ったことが

B・O・Sがピットに天罰を下し、DCに来たのは2255年…101のアイツが出て来るのは、2277年…

2255年で主人公が18だとしたら、ストーリー始動時に主人公はいいオッサンに!?

まずいところですが、101のアイツが来る頃には…主人公はキャラピタル・ウェイストランドを制覇しているかも

ワシントンDC逃走劇

首都の廃墟であるダウンタウンに響き渡る、絶え間ない銃声と獣のような怒鳴り声…

放たれた弾丸がコンクリートをえぐり、廃墟を吹く風が砂塵を舞い上がらせる

廃墟の奥から次から次へと現れる緑の巨人に、同じくたくさんの増援が来る黒いアーマーを着た集団…

彼らの持つ銃火器からは絶え間なく弾丸が放たれ、双方とも多数の死傷者を出していた

この地獄のような戦場のほぼ中央で、私たちは足止めをくらい、建物の影から動けないでいた

武器・兵器を入手した私たちは、来た道を戻ろうとしたところ、タロンの傭兵と鉢合わせになった

その時ニコライがとっさに銃を発砲し、タロンの傭兵を撃ち殺したのだが、運が悪いことにタロンの部隊が付近にいたのだ

タロンの傭兵と銃撃戦になったが、さらについていなかったのが、スーパーミュータントの一団が現れたことだ

前と後ろで挟み撃ちになる形となり、私たちはとっさに建物の中に隠れ今に至る…

「だめネ、ヤツら撤退する気ないヨ。
そして少しずつ近付いて来てるネ。」

「クソっ…なんてついてないんだ！」

非常に拙い事態ではあるが、焦っていても何も解決しない
私とニコライは打開策を考えるが、徐々に大きくなる銃声と爆音に、
若干の焦りを見せる

「他に出口はないのか？」

裏口とかがあれば、ヤツらを回避して逃げられる。」

「ダメだ、さっき見たが崩れ落ちて奥に進めない。」

「なら二階はどうだ？」

「蜂の巣にされる危険があるが、他に手はない…行ってみよう。」

私の提案で上階に行き、可能であればそこから飛び降りて脱出する
ことにした

時間稼ぎに入って来た扉の前にバリケードを造り、私たちは崩れや
すい階段を、慎重に登って行く…

薄暗い建物内で私たちは互いにカバーしあい、先を進む

「…鍵がかかっている。」

「オレにまかせな！」

ミハイルは斧を両手に持ち、頭上に振り上げて一気に振り下ろす
斧は木の扉を容易く打ち破り、鍵の壊れた扉をミハイルが蹴り破る

「アイヤー、相変わらず荒っぽイネ。」

「結果オーライだ…ん？」

ミハイルが何かの異変に気付く
次の瞬間ミハイルは斧を構え、横に勢い良く振った
グシャツと何かが砕け散る気持ちの悪い音が響くと、次いでおぞましい叫び声が響く

「フェラル・グールだ、気を付けろ！」

腐った嫌な臭いが漂う通路の奥から、醜く変異したグールが走って
来る弱点となる頭を狙い撃ち、迫り来るグールを射殺していくが、
グールもまた次々に現れる

「キリがない、走るぞ！」

「ちよっ、アタシは走れないよ！」

私は悲鳴をあげるソフィーを肩に担ぎ、後ろをミハイルに援護してもらいながら走る
前を走るニコライはナイフとピストルでゲールをなぎ倒し、通路を少しの間確保する…

そして突き当たりの窓ガラスを突き破り、地上へと飛び降りる
私とミハイル、ヤンもそれに続いて窓から飛び降りる…

「大丈夫か!？」

「ああ平気だ!」

二階から飛び降りたので大した衝撃は無く、お互いに大事がないことを確認すると、すぐに私たちは走り出す

「この先にもう一つメトロがある！
そこから脱出しよう!」

「ああ、分かった!」

振り返りながら言うニコライに頷いたが、1ブロック先の角からミュータントが姿を現し、私はすぐさま銃を引き抜いて発砲した
弾丸は外れたが、ミュータントに気付いたニコライが数発頭目掛け発砲し仕留める

「こんの野郎！」

いきり立ってミハイルが斧を振り上げ猛然と突撃すると、ミュータントもハンマーを持って突進して来る

ミハイルの振り下ろした斧はミュータントの持つハンマーとぶつかり合い、衝撃で柄の部分がベキツと音をたててへし折れる

「人間、トットト死ネ！」

「てめえがくたばりやがれ！」

武器を無くしたミハイルはミュータントの眼に指を突き刺し、ミュータントが怯んだスキに背のショットガンを手にとる

銃口をミュータントの額に押し当て、引き金を引いて頭を木っ端微塵に吹き飛ばす

「よくやったミハイル！」

「おうよ……って、タロンのくそ共も来やがったぞ！」

後方からタロンの部隊が追いかけて来て、此方に向けて銃を乱射する前からもミュータントは現れているが、同じつては踏まない
まとまりがなく比較的突破し易い、ミュータントたちを突破すべく、

私たちは射撃しながら走る

「ヤン、左手のミュータントをぶっ飛ばせ！」

「分かったヨ、ミハイルさん！」

ヤンが左側の道から来るミュータントをグレネードで爆殺…混乱するミュータントを突破し、メトロに続く階段を一気に下る…ミュータントはメトロ内に消えた私たちを追おうとするも、後ろから来たタロンと接触し、目標を変えた…

メトロに入ってからもずっと走り続けた私たちは、疲労が見え始めた頃に、ちょうどあった機関室のような場所に入って休む…

「アレックス、もう大丈夫だから下ろしてくれよ。」

「ああ、すまない。」

私は彼女をゆっくり床に降ろす…肩に担がれて苦しかったのか、彼女は顔を少ししかめて腹部をさする
さすがの私も…ニコライたちもあの逃走劇には疲れたらしく、くたびれたように壁にもたれかかっている

しばらく誰も言葉を発しなく、荒い呼吸音が小さなこの部屋に響いていた

体が落ち着いたところで、私たちは装備を確認する

ミハイルの斧は壊れてしまったが、あれだけの逃走で入手した武器・兵器を無くさなかったのは良かった

応戦もあまりしなかったので、弾薬もほとんど手付かずだ

「ダウンタウンはいつもこうなのか？」

「…最近タロンの傭兵が現れてから、一層危険な場所になっちまった…。」

キャピタル・ウェイストランドで、最も命を落としやすい場所さ。」

マスクを外したニコライは煙草をくわえ、マッチを擦って火をつける口を含んだ紫煙を吐き出した彼は、目を閉じて壁にもたれかかる

「ふう……とりあえず、DCはしばらくごめんだな。」

「同感だ。」

同じ苦勞を味わった私たちは、妙な結束力が生まれた

信頼と呼ぶにはまだ小さ過ぎるが、ともに行動をしていくうちに、やがて私たちは互いに信頼出来る仲間となる…

そして私たちは最も強い勢力の一つとして、ここワシントンDCで

名を馳せることとなるが…それはまだ先の話だ

自分たちがワシントンDCを揺るがす存在になるとも知らず、私たちはしばしの休息を取る…

そして疲労を癒やした後、私たちは地上へと続く道に行く…

）S・P・E・C・I・A・L or SKILLS）

アレックス（主人公）

Strength[7]

Perception[8]

Endurance[7]

Charisma[6]

Intelligence[9]

Agility[8]

Luck[5]

Barter[52]

Energy Weapons[93]

Explosives [64]

Guns [84]

Lockpick [16]

Medicine [47]

Melee Weapons [73]

Repair [86]

Science [90]

Sneaking [75]

Survival [40]

Unarmed [79]

装備（オリジナル含む）

レンジャー・ヘルメット

レンジャー・コンバットアーマー

ロックピック以外は万能

ソフィア（ソフイー）

Strength [6]

Perception [6]

Endurance [5]

Charisma [4]

Intelligence [3]

Agility [7]

Luck [10]

Barter [22]

Energy Weapons [12] Explosives [4]

8

Guns [66]

Lockpick [55]

Medicine [10]

Melee Weapons [68]

Repair [32]

Science [18]

Sneaking [53]

Survival [50]

Unarmed [68]

装備

傭兵服・トラブルメーカー

向こうみずなレイダー娘

ワシントンDC逃走劇（後書き）

ニコライ、ミハイル、ヤンのステータスは次回の終わりにて…

さてさて、拠点候補が一つ増えました

- ・ジャーマンタウン警察本部
- ・ベセスタ廃墟

の二つです

ベセスタ廃墟もマップの中央付近かつ、広いので街として機能する可能性アリ

ちなみにコンスタンティン砦は、地理的なことと、危険な生物が多数いるため残念ながら除外しました
デスクローに遭遇したら、死にます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6624z/>

Fallout-Another Story

2012年1月13日22時45分発行